

ガラテヤ書を読む視点を考える —集団主義的世界観と黙示的世界観—

眞鍋猷一

<はじめに>

近年、福音および宣教という概念に対して考察を深めようとする姿勢が福音派教会に広がっているように思われる¹。しかし、教会が社会に対する対抗文化的な生き方を提供する共同体として考えられることは少なく、個人の魂へケアを与える機関として捉えられている事がいまだ多いのではないだろうか。そのような視点の下では、個人と神との関係に対して強調がおかれ、個人間の関係性については二次的なものとされることが多い。このような個人と神の関係に関する過度の強調は、ガラテヤ書をはじめとする新約聖書を個人始点の世界観²から読んだ結果であると言える。

¹ 東京ミッション研究所選書シリーズ、中でもクリストファー・J・H・ライト『神の宣教—聖書の壮大な物語を読み解く』(東京ミッション研究所、2012-2016年)や『ケープタウン決意表明』(いのちのことば社、2012年)、スコット・マクナイト『福音の再発見』(キリスト新聞社、2013年)などの出版にこの動きが見られる。また、日本福音主義神学会の学会誌テーマにも反映が見られる。2013年は「ホリスティックな宣教」(『福音主義神学』第44号)、2016-18年は主題が「福音の理解」であり、副題はそれぞれ、「罪をめぐって」(47号)・「信仰をめぐって」(48号)・「義認をめぐって」(49号)である。

² 本小論において、個人始点の世界観という言葉で意味していることは、Hollingerによる個人主義の定義に従っている。「個人が最も基本的な単位であり、すべての存在を定義する原理であると理解する現実の見方」という定義である。Dennis P. Hollinger, *Individualism and Social Ethics* (New York: University Press of America, 1983), 16. 個人がすべての存在を定義する原理であると考えられるため、すべての事は個人の決断によって始まるとされる。社会はこれらの個人の集まりとして見られ、重要な事はどのように個人が賢明な決断をなすかという事にかかってい

筆者による修士論文全体³は、ラッセルによってなされたガラテヤ書 5:16-26 に関する異なった読み方⁴を支持し、それを補強するものである。本学会誌がすでに義認の再考⁵・諸力理解⁶を扱ってきた事に鑑み、集団主義的世界観に基づいてガラテヤ書を読む事に重点をおいて論文全体からの抜粋を行い、本小論として提示したい。この小さな試みが、福音と教会に関しての考察を深めていく助けとなれば幸いである。

I: ガラテヤ書の伝統的な読み方とその問題点

I—A: 伝統的な解釈

個人始点の世界観を持つ解釈者は、すべての事を個人の合理的な決断によって説明しようとする。このような視点の下では、社会関係や神による邪悪な力への勝利といった概念はあまり注意を払われない。また、たとえ個人よりも大きな集団や社会が考えられる事があっても、その流れは個人からより大きな集団へと向かう方向に限られる。伝統的なガラテヤ書の解釈はこのような視点に基づいてなされている。

従来の解釈が想定するガラテヤ書の執筆状況は、次のようなものである。クリスチャンの教師がガラテヤを訪れ、パウロが宣言したものとは「異なった

る。個人が考え方を考えるためには、そこに合理的な理由がなければならないと想定される。一般的にこのような現実の見方は、個人主義的世界観と呼ばれる。しかし、個人主義という言葉に日本語において多様な意味合いがすでに含まれてしまっているため、本小論においては個人始点の世界観と呼ぶ。

³ Kenichi Manabe, "Not an Inside Battle but the Choice of Group: Galatians 5:12-26 with the Emphasis on the Term 'Flesh'" (master's thesis, Fresno Pacific University, 2016).

⁴ Walter Bo Russell III, *The Flesh/Spirit Conflict in Galatians* (Lanham: University Press of America, 1997). 彼は主題を次のように述べている。「肉と霊とは、クリスチャンの内側の二重性を象徴しているのではない、むしろ2つの争う時代もしくは2つの争う存在と考え方という外部の対比を象徴しているのである。」Ibid., 2. 彼はこの主題を非常に説得力のある方法で展開していく。私の取る解釈は、多くをこの見方に依っている。特に今回の発表に関する集団主義的世界観からガラテヤ書全体を読むという方法は、彼の見方にほとんどを負っている。

⁵ 『福音主義神学』第49号(日本福音主義神学会、2018年)。

⁶ 山口希生「宇宙的な力としての罪」『福音主義神学』第48号(日本福音主義神学会、2017年)。

福音」(1:6)を述べ伝えた。彼らは割礼の必要性などのユダヤ的な教えを導入しようとし、「救いのために不可欠なものとして、異邦人クリスチャンに対しておそらくモーセ律法の完全な遵守をも求めた」⁷。これらの教師は、「パウロが導いた回心者たちのうちで自らの教えに対する信頼性を得るために、パウロを中傷し、彼の使徒としての資格に疑問を投げかけた」⁸。ガラテヤのクリスチャンが急速に偽りの福音を受け入れたのは「自らの救いを得るためには、何かをしたいという微妙な誘惑のためである・・・人のプライドは値なしのめぐみを受け入れる事が非常に困難なのである」⁹。

この状況に対して、パウロは以下のように応答したと考えられている。福音とは、神からの値なしのめぐみを受け取ることである。それは、「神に信頼して自らの努力に頼ることのない信仰に関してのものである」¹⁰。特にパウロは次の事を明白にしている。「福音のメッセージは律法を守ることによって救いを得るようにと言う勧めでは決してない」¹¹。パウロは、彼の福音における神の権威に注意を向けさせ、自らの使徒性を弁護している。これは、「自伝的な描写によって始め・・・エルサレム教会の指導者達からの独立性を打ち立てることを狙いとする」¹² ことにおいて明らかである。

ここまでの簡潔な描写においても、個人の決定によってすべてが始まるという前提が明らかにみられる。ガラテヤのクリスチャンが急速に偽りの福音を受け入れた理由は、各個人のプライドが原因とされており、心理的な側面からの説明となっている。また、パウロが自らの使徒性を弁護したことも、エルサレム教会からの彼の独立性を打ち立てることが狙いであったとされてきた。個人が考え方を考えるためには、そこに合理的な理由、内面的な理由がなければ

⁷ R. Alan Cole, *Galatians* (Tyndale New Testament Commentaries; Grand Rapids: Eerdmans, 1989), 27. 以下、引用文が日本語で引用元が英書の場合、筆者による私訳である。

⁸ F. F. Bruce, *Commentary on Galatians* (Grand Rapids: Eerdmans, 1982), 20.

⁹ Cole, *Galatians*, 36.

¹⁰ Leon Morris, *Galatians: Paul's Charter of Christian Freedom* (Downers Grove: InterVarsity Press, 1996), 27.

¹¹ Ibid., 38.

¹² Bruce, *Commentary on Galatians*, 20.

ならない。そのような個人始点の世界観が従来の解釈の背後にあることがうかがえる。

上記のような解釈に基づき、ガラテヤ書は伝統的に三つの部分に分けられている。1-2 章は弁護部分、つまり、パウロが自らの使徒としての権威を弁護する箇所である。3-4 章は神学的議論、そして 5-6 章はクリスチャンに対する倫理的な勧めである。

I - B : 伝統的解釈の問題点

以上で説明したガラテヤ書の従来の見方では、全体を統一的なものとして読むことが困難となっていることを以下では指摘したい。二つの点を主に扱う。第一に、従来の見方は、パウロが使徒性を弁護する箇所が手紙全体に対してどのような意義を持っているかを十分に説明できていない。次に、伝統的解釈では 5-6 章の倫理的勧めの箇所が神学的議論部分の想定と衝突せざるを得ない事を示したい。

まず、伝統的な見方では 1-2 章が個人的な物語として読まれ、3-4 章の神学部分に対してあまり関係のないものとして理解されている事を指摘する。この部分は、パウロの時系列を再構成するためにのみ主に用いられている。そして、なぜパウロがあまり論じる事のない自らの過去の経験をあれほどの分量をもってガラテヤ書において記しているのかを説明できていない¹³。パウロの主な関心が、割礼・律法遵守と個人の救いとの関連であるのならば、なぜ彼は過去の経験を冒頭で明らかにする必要があったのだろうか。時に、ガラテヤでの偽教師たちによる敵対が強かったことが説明としてなされることがある。しかし、この理由づけは倫理的部分での断絶を説明する際に致命的な欠陥となってしまうことを後述する。伝統的な解釈では、パウロが過去の経験を記している 1-2 章をガラテヤ書の他の部分と適切に結びつけることに失敗してしまうのである。

倫理的勧め (5-6 章) と主要な議論部分 (3-4 章) との間には、より明確に不一致が見られる。伝統的な解釈では、神学部分の理解と倫理部分とを結び付

けるのが困難であるため、学者の中にはパウロの論敵としてさらにもう 1 集団を加える者さえいる。

それゆえ、私たちの前にある聖書箇所から判断するならば、三つ目の「異邦人」集団が存在した可能性がある。彼らは「自由」を賛美し、それが彼らにとっては制限のない無節制への許可を与えていた。・・・パウロはそのような集団を支持したくないと望み、それゆえおそらくガラテヤ書において三つ巴の戦いを戦っているのである¹⁴。

これは伝統的な読み方が、ガラテヤ書全体を一つの意図をもって統合された書として自然に扱うことが出来ていない事の非常に強い証明となっている。第三の集団の存在に同意しない者達もまた、そこに大きな断絶がある事を認めている¹⁵。

1-2 章におけるパウロの過去の経験が記されている理由をガラテヤでの偽教師たちによる敵対が強いことであると説明する立場は、ここでその矛盾を明らかにする。それほど強い敵対を背景に書かれた手紙であると主張するにも関わらず、第三の集団を論敵に加えずには倫理部分の背景が説明できなくなってしまうのである。

それでは、どのような要素が学者達に強い不一致を見る様に促しているのだろうか。その答えは、悪徳のリスト (5:19-21) である。ここにおいて、伝統的な解釈は超える事の出来ない壁に出会うのである。すでに見たように、伝統的な読み方は偽教師たちが割礼の要求と共に律法を受け入れる事を主張して律法を擁護したと理解している。この見方の下では、偽教師たちはパリサイ派を

¹⁴ Cole, *Galatians*, 203.

¹⁵ 例えば、ウィリアムズは次のように述べている。「ガラテヤの教会に対するパウロの手紙の大部分は、ここまで主に 1 つの主要な狙いを持ってきた。つまり、手紙の受取人に対して扇動者による申し入れを拒絶するようにという事である。・・・しかしながら 5:13 において、使徒は扇動者による脅威から『肉』に対する脅威へと転換しているようである。」(下線引用者) Sam K. Williams, *Galatians* (Abingdon New Testament Commentaries; Nashville: Abingdon Press, 1997), 144.

¹³ Beverly Roberts Gaventa, *Our Mother Saint Paul* (Louisville: Westminster John Knox Press, 2007), 88.

単純化して描いたような倫理的な成熟を追い求める者達として想定されている。しかし、悪徳のリストは律法によって倫理的成熟を求める偽教師という解釈にはそぐわない。それゆえ、すでに述べたようにある人々は第3の集団の存在を提示することでこの困難を乗り越えようとしているのである。

3-4章の神学的部分と5-6章の倫理的部分に断絶を見ざるをえない伝統的な解釈と異なり、ガラテヤ書の本文自体は神学的部分と倫理的部分との間に連続性を保っている。この事は5:18に明白に見られる。「御霊によって導かれているなら、あなたがたは律法の下にはいません。」¹⁶ このように、3-4章の神学部分でみられる律法の問題が依然として議論対象であることがわかる。パウロがなぜここで律法に対して言及しているのかを理解するのが困難であるため、伝統的な解釈を取る学者たちは「律法の下」という言葉と他の部分との関係についても適切な注釈をなしていない¹⁷。

以上で指摘してきたように、個人始点の世界観でガラテヤ書を読む見方では、書全体をパウロからの統一した懇願の書として読むことが困難なのである。

II：代わりとなる読み方と伝統的解釈の問題点に対する一つ目の解決

ここまで扱ってきた伝統的な解釈は、個人始点の世界観に基づいてなされた捉え方である。すべての要素が個人の決断という視点から説明される傾向を持ち、個人よりも大きな概念には十分な注意が払われていなかった。このような読み方の下で、ガラテヤ書における主要な目的は、どのように個人が救いへの正しい道を見出すかであるとされていた。しかし、この見方ではガラテヤ書を統一的なものとして読むことが困難であった。

以下では、ガラテヤ書の執筆者および読者が有していた世界観についての代替案を示したい。パウロおよび当時の地中海世界の人々が個人始点の見方とは異なった見方を有していた事をまず指摘する。彼らは、真理もしくは内面における衝突の結果ではなく、集団力学に基づいて決断をなしていたのである。続いて、そのような集団主義的世界観をもってガラテヤ書を解釈した際に、著者

の意図をより十分に理解できる事を示す。この結果、集団主義的世界観によってガラテヤ書を読むならば、従来の解釈よりも統一性をもった手紙として読めることが明らかになるだろう。

II-A：個人始点の世界観とは異なった見方

何かを理解する時に、受け取り側が自らの世界観を持ち込むことは避けがたい。しかし、健全な釈義を行うためには、持ち込んでいる事に関して注意深くある必要がある。では、どのような要素に対して特に自覚的であるべきなのだろうか。人が前提としやすいいくつかの典型的な要素としてマリーナは以下を指摘している¹⁸。

- (1) どのように社会が家族、政府、経済そして宗教的制度と共に機能しているか
- (2) 人、集団、物事に関する価値の理解
- (3) 他の人間と共に動くときに、どのように個人が実際にふるまうべきか、もしくはどのようにふるまう事を期待されているかに関する知識

これらの要素は宗教および決断過程に関して、私たちが前提を持ちやすい事を示している。次のマリーナの言葉は、パウロの時代における決断過程が、伝統的見方の前提としているものとどれほど異なっているかを教えてくれる。

私たちの文化においては、人の心理的な構成を考える傾向がある。その人の幼年からの人格形成や、個性、家庭の事情などが、自分であれ他人に関してであれ、人の振舞いを理解し説明するためのおそらく最も重要な要素である。しかし、もしも注意深く新約聖書や他の同時期の著作物を読むならば、そのような情報が全く欠けている事を見出すだろう・・・このような状況である最も明確な理由は、新約聖書に描かれている人々、そして新約聖書を書いている人々が、心理的・個人的な状況に対して関心がなかったから

¹⁶ 以下、日本語のみによる聖書引用は、新改訳2017による。

¹⁷ 例えば、コールはこの言葉を自らのわざに頼る事への一般的な言及であるとしか理解していない。Cole, *Galatians*, 209.

¹⁸ Bruce J. Malina and Jerome H. Neyrey, *Portraits of Paul* (Louisville: Westminster John Knox Press, 1996), 8.

である¹⁹。

伝統的なガラテヤ書の捉え方は、個人始点の世界観を反映しているものであった。コールが、ガラテヤ人たちが真の福音から離れた理由として各個人の心理的な説明に依存していたことは先に確認した。さらに、学者たちは1-2章に記されている事に対して自らの世界観を持ち込み、パウロの人格形成の視点でその箇所を捉えていた。しかし、人が神学を変える理由は、1世紀地中海世界において、個人始点の世界観と全く異なったものであった。マリーナは、当時の人々が神学を変更する理由を次のように示している。

言いかえるならば、どのような神学における変化も論理的・「科学的」な首尾一貫性の要求や哲学的な制度からの要求に基づいてはいなかっただろう。むしろ、神学的な変化はある人やその人が属する集団の名誉、社会的立場、影響力や名声に対して貢献するような価値ある物事や出来事、もしくは振舞いに由来している。「真理」のような抽象的な概念への関心は、それがより社会的に重要な象徴へ変換できなければ、ほとんど価値がなかっただろう²⁰。

この様に、宗教や決断について個人始点の世界観とは非常に異なった価値観があったことが確認できる。マリーナは次のように結論づけている。

新約聖書において「なぜなら」「それは一のためである」などという大きなサンプルを取って考えることで確証するようお願いしたい。私の知る限り、これらの言明の内に心理的、内省的、個人的な説明を含んでいるものは何もない。新約聖書は、人の振舞いに関してそのような個人的な独特の動機や、内省的に生じた説明というものを単に含んでいないのである。そのような説明は集団的な人格にとっては、本当に些細な事なのである。むしろ、個人はある集団の兆候を反映する、もしくは象徴的な存在なのである²¹。

パウロ及びその手紙の受取人であったガラテヤのクリスチャン達は、心理的・内省的・個人的な動機ではないものに基づいて、決断を行っていたといえる²²。

II-B：集団主義的世界観とガラテヤ書における幾つかの例

ここまで、個人の内面にに基づく決断とは異なった基準があったことを見てきた。パウロ、および原読者の見方を正しく理解するために、パウロと同時代の人々はどのように自分たちを理解していたかに関しての情報を幾つか要約して提示したい。また、その世界観をもってガラテヤ書を解釈する際に、どのように理解できるかを例示する。集団主義的世界観に基づいてガラテヤ書全体を解釈するならば、パウロが統合された意図を持って手紙を書いていたと説明できる事が明らかになるだろう。

パウロと同時代の人々は集団主義的な人格を持っていた²³。個人の関心が集団よりも重要であるとする個人始点の世界観と異なり、集団主義的世界観の下では人は常に「自らが分離不可能であると経験する集団との関わりにおいて自らを捉える」²⁴。以下において、集団主義的世界観における人の見方を幾つか

¹⁹ Bruce J. Malina, *The New Testament World: Insights from Cultural Anthropology*, 3rd ed. (Louisville: Westminster John Knox Press, 2001), 61.

²⁰ Bruce J. Malina, "'Religion' in the World of Paul," *Biblical Theology Bulletin* 16 (1986), 98.

²¹ Malina, *The New Testament World*, 65.

²² パウロによる回心も同様だろう。主に心理的な側面から説明がなされることがある。パウロは神の前に律法を守れないことでの罪責感を感じていた。しかし、キリストを通しての異なった道を発見したのであると。しかし、よく指摘されているように、この説明は聖書証言と異なっている。ピリピ3章6節において、パウロはパリサイ派として生きていた時に律法の要求することを満たしていたと明確に記している。κατὰ ζήλον διώκων τὴν ἐκκλησίαν, κατὰ δικαιοσύνην τὴν ἐν νόμῳ γενόμενος ἄμεμπτος. (熱意については教会を迫害し、律法の内にあることの義については非難されない者であります。) 新約聖書自体に記されているパウロは、個人の内面的な罪責感ではなく、他の理由で回心をしたと考える方が新約聖書の記述に沿うといえる。

²³ Malina and Neyrey, *Portraits of Paul*, 16.

²⁴ Malina, *The New Testament World*, 62.

提示する。

(1) アイデンティティ

例えば、アイデンティティについて考えてみたい。集団主義的世界観においては、自らがどのような存在であるのかを理解するために他者を必要とする。他者が述べた事や行っている事、そして考えた事を内面化するのである。なぜなら、この世界観を持つ者は、他者の期待に応えることが人として生きていく上で欠かせないと信じているからである。「このような人は、注意の中心を自らではなく、承認を与えたり控えたりすることの出来る他者からの要求や期待の上に置いており、相互関係を試す必要がある。重要な価値観は、罪責感ではなく、名誉と恥である」²⁵。自分という日本語が現しているように、このように集団の中での分によって自らを捉える見方は、日本人にも共有されてきた世界観だろう。

では、この世界観をもってどのようにガラテヤ書を解釈できるのだろうか。重要な点の一つは、ガラテヤ人たちがなぜ偽りの福音を急速に受け入れたのかに関する理解である。上で確認したように、人々は自らのアイデンティティを集団に属する事によって得ていた。注意の中心は、集団における役割や規則を決定できるような他者からの期待や要求の上に置かれていた。それゆえ、このような世界観に生きるガラテヤのクリスチャン達にとって、パウロよりも権威を持つと主張している教師たちの言葉が重要だと判断される事は容易に想像できる。

彼らにとっては、そのような教師たちは、弟や妹の誕生によって家族内の役割や適切なふるまいを変更できる両親のような存在だったのである。私たち日本人は、弟や妹が生まれると、兄・姉といった新しい役割を求められる。そして、そのふるまいの変更は、集団における役割を決定できる者、両親の期待や要求にかかっている。同様に、ガラテヤのクリスチャンにとって、権威を主張する偽教師たちに従うのは、神の家族にとどまるために自然な出来事であった。このため、ガラテヤ人たちが他の教えに急速に変わっていく事は、集団主

義的世界観をもった社会においては、驚くような事ではなかったと思われる。ガラテヤ人たちにとって焦点となっていたのは、属する集団において適切なふるまいとは何であるのかという事だったのである。

このように理解するならば、パウロが1-2章において何を意図しているのが明白となる。パウロは神学的な議論に入る前に自らの権威を強く強調している(1:1、11-12、16-20、2:6-10、11-21)。従来の解釈は、パウロがそこで使徒としての権威を弁護しているとみる点では正しい。しかし、その理由を捉えられていなかった。今や私たちは、なぜパウロが権威をすぐに弁護しているかが理解できる。偽教師達ではなく、パウロこそが教会における役割やふるまいを決定できる権威を持っていると示す必要があったのである。もしも、自らの集団における権威を示すことが出来なければ、彼の神学的議論はガラテヤのクリスチャンに対してあまり効果を持たなかっただろう。

上記のような理解は、いくつかの箇所がもつより十分な意味合いをくみ取る助けともなる。1:6を例として見てみたい。

Θαυμάζω ὅτι οὕτως ταχέως μετατίθεσθε ἀπὸ τοῦ καλέσαντος ὑμᾶς ἐν χάριτι [Χριστοῦ] εἰς ἕτερον εὐαγγέλιον. (私は、あなた方がそれほど急にキリストのめぐみの内にあなた方を呼び出した方から異なった福音へと転換したことに驚いています。)²⁶

このパウロの言葉は、ガラテヤの読者を大いに驚かせたに違いない。ガラテヤのクリスチャン達は、教師たち、パウロ、そして彼ら自身が神の家族として、同じ集団に属していると理解していただろう。それに対して、パウロは、ガラテヤのクリスチャンたちは異なった集団に移動していると告げているのである。それは、教会という集団を設立した父を離れての移動である²⁷。この言葉はガラテヤの読者に衝撃を与え、自らがどの集団に属すべきかを真剣に考えさせるものとなっただろう。

²⁶ 本論文においてギリシャ語に続く括弧内は論者による私訳である。

²⁷ 1:1、3は、神を父として言及している。ガラテヤ書における父の重要性については、Russell, 98-100を参照すること。

²⁵ Ibid.